

『はいからさんに逢えるまち』とは

「はいからさん」とは常に時代をリードし、改革していく人と捉えています。

会津の先人には高い志と熱い情熱を持って社会に

貢献した人たちがたくさんいました。

21 世紀の今、私達もその琴線に触れながら、明るく勇気ある自分を見つけ出し、

成長する「はいからさん」でありたいと願っています。

この度、会津ゆかりの先人偉人を後世に語りつぐ「かたりべ」として

伝えるために冊子を作成いたしました。

会津の「はいからさん語り部」育成プロジェクト実行委員会

大町通り今昔

大町は至徳元年（一三八四）^{あしな}葦名氏第 7 代直盛によって置かれた町で、この頃はお城の西側、現在の^{よねだい}米代の地にありました。その後、1590 年豊臣秀吉により会津領主に任命された、^{がもううじ}蒲生氏郷の町造りで現在の地に移されました。江戸時代の大町は南は大町^{かくもん}口郭門から、北へ大町^{なこや}名子屋町までを指します。通りの長さは約 753 m、道幅約 7.3 m で、商人が多く住む町でした。町は南から大町^{たて}竪町、同二之^{ふた}之、同三之^{さん}之、同四之^よ之、そして大町名子屋町となっており、東西の道である大町一〜四之町、^{どじょうこうじ}道場小路町が大町に付属しました。

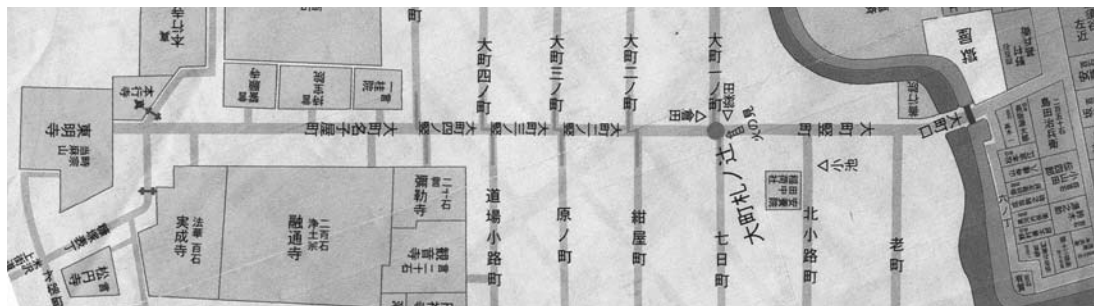
大町は町方の中心地で、一之町と七日町が分かれる食い違いの十字路には、法令を掲げる^{こうさつ}高札場が設けられました。そのためこの十字路は「大町札の辻」ともいわれました。またここは会津五街道、東へ白河街道、二本松街道、北へ米沢街道、西へ越後街道、南へ下野街道の基点でもありました。辻の南には五層構造、高さ約 12.6 m の火の見櫓も建てられていました。

蒲生時代には毎日持ち回りで、城下の各町に市が立ちました。大町では五と十の日の月六回で、六斎市といわれました。年の初めの市は一月十日大町の十日市で、この日は大勢の人が押し寄せ大賑わいで、現在も開かれています。当時の十日市は未明の米引き行事で始まり、これが終わると起き上がり小法師や風車、麻、塩などの市店が開かれ夜遅くまで賑わいました。

明治15年(1882)、福島県令に就任した三島通庸^{みしまみちつね}は、大町四ツ角を起点とした山形、新潟、栃木への新しい道路、会津三方道路を建設します。それまでの米沢街道は大町通りを北へ行くと、東明寺^{とうみょうじ}で行き止まりとなり、左脇から糠塚、石堂を通るルートでした。通庸は東明寺を移転させ、まっすぐの道を開き、これが現在の大町通りとなりました。

明治32年(1899)には、岩越鉄道^{がんえつ}(現磐越西線)郡山・若松駅(現会津若松駅)間が開通、大町通りがメインストリートとなりました。駅前には旅館や運送会社が建ち並び、大勢の人で賑わいました。しかし最近ではモータリゼーションの発達で、町の賑わいは郊外に移ってきています。それでもアネッサクラブを始め、大町通りの皆さんは、再び賑わいを取り戻すべく努力を重ねています。この冊子もその一環で、大町通りを中心とした「はいからさん」に思いを馳せていただきたいと思います。

元会津若松市立会津図書館長 野口信一



目 次

『はいからさんに逢えるまち』 とは……………	1P
大町通り今昔 ……………	2、 3P
目次 ……………	4P
『会津の先人・偉人』 ……………	5P ～ 36P
『八重物語り』 ……………	37P ～ 57P

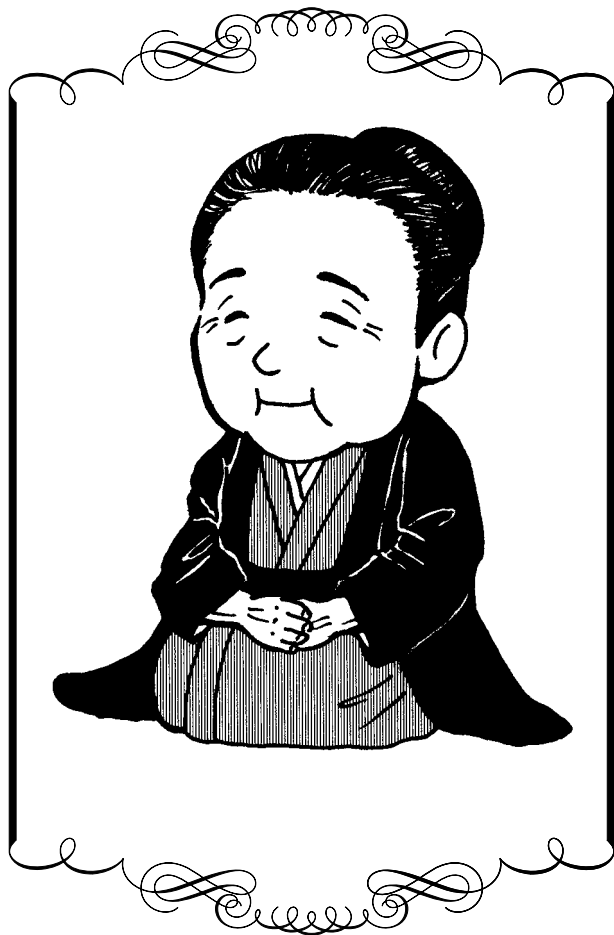
会津の先人・偉人

う り う い わ
瓜生 岩

1829 ~ 1897

ぼしん
戊辰戦争では、敵味方の別なく救助し看護。巷に路傍に迷う子、両親を失って孤児となった子などを自分の家で育てた。その働きは西軍参謀板垣退助の耳にも届き、窮民貧児救済の「育児会・産婆看護婦養成所・私立救世病院」を設立。

社会福祉の母といわれ、その運動に半生を捧げ、明治29年に藍綬褒章受章者。日本のナイチンゲールとも賞賛された慈善事業家である。

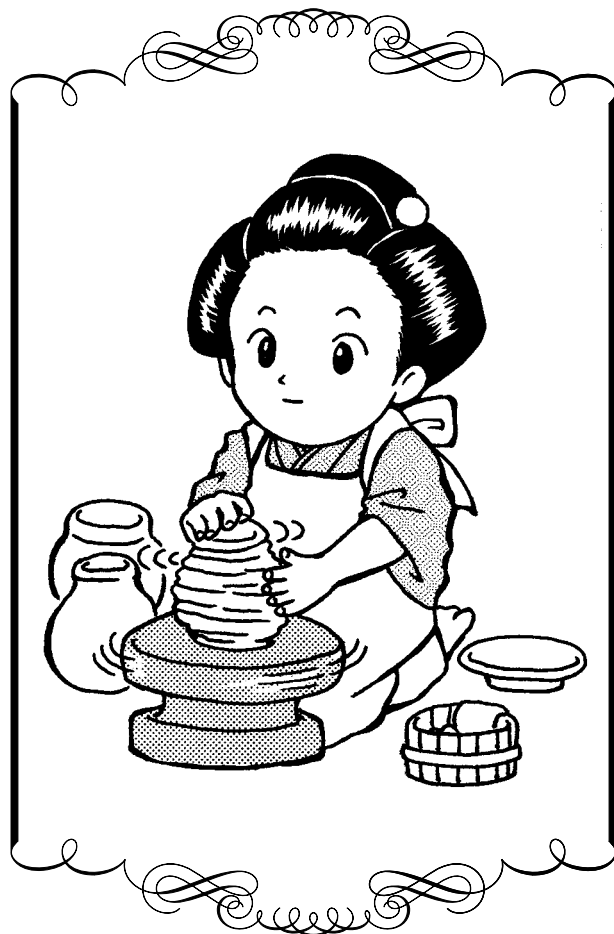


いたや まる 板谷 まる

1870 ~ 1958

17歳まで会津坂下あいづばんげで育ち、瓜生岩を頼って上京し、共立女子職業学校に入学。卒業後、瓜生岩の協力のもと、会津女子職業学校(校長北村モト)を創設したが、結婚のため海老名リンの若松女学校に合併。

まるはイタリア製陶の流れをくむマジョリカの作品に下絵を書き、陶芸家の夫板谷嘉七(号・波山はざん)と共同制作し、玉蘭の雅号で出品。当時は唯一の女性陶芸家として存在感を高めた。



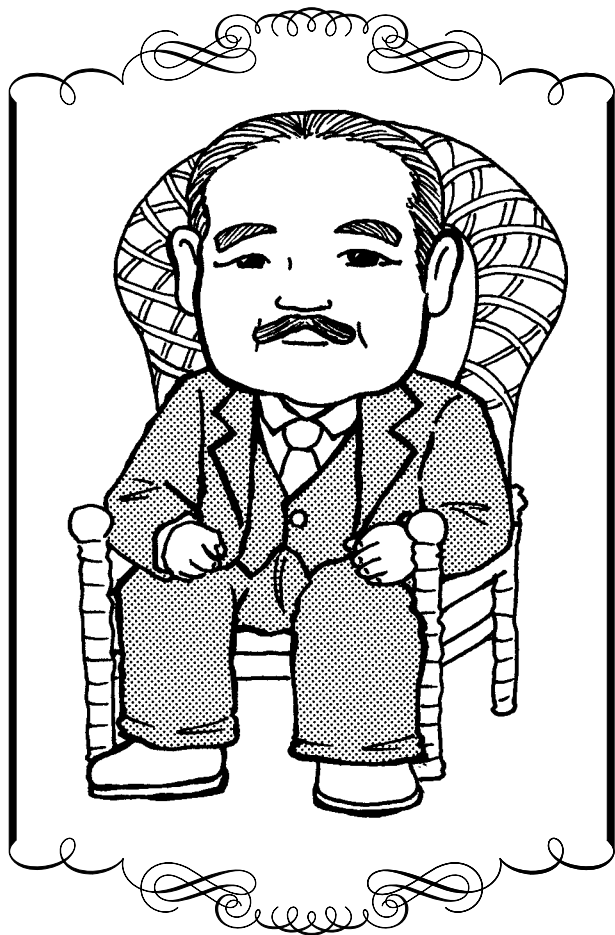
いぶか かのすけ
井深 梶之助

1854 ~ 1940

藩主松平容保^{かたもり}の小姓をつとめ、維新後洗礼を受ける。東京一致神学校を卒業して、同校が明治学院となったとき、院長ヘボンの元で副総理となる。

明治 24 年第 2 代明治学院大学総理となる。

日本を外国に紹介したことで功績が大きい。文部省の法定学校内の宗教教育停止に対し、山県内閣に抗議し、聖書講義、礼拝執行の特権を回復した硬骨漢でもある。



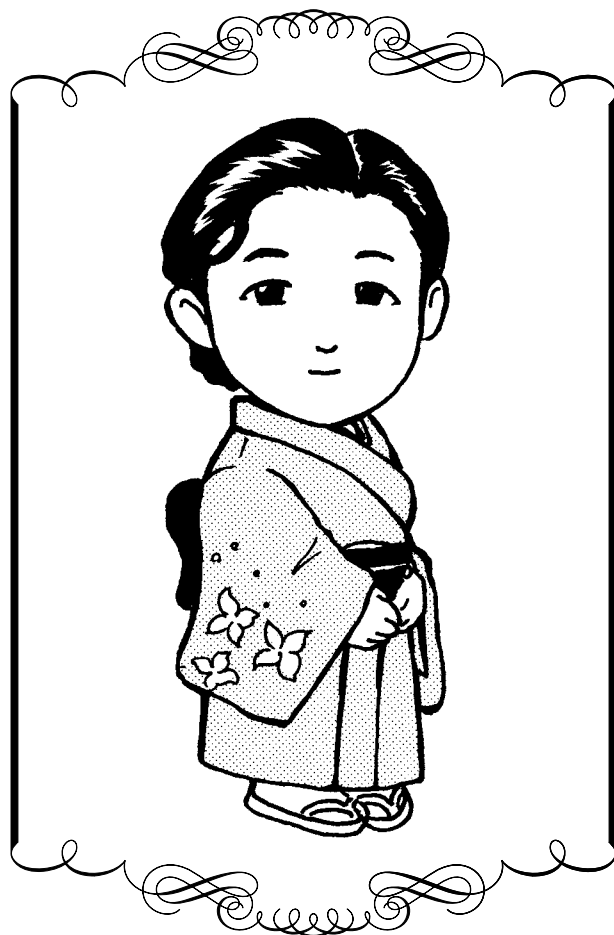
いぶかやえ
井深 八重

1897 ~ 1989

伯父梶之助夫妻の芝白金邸で育てられ、小学校を卒業した八重は同郷出身の新島八重に託され、同志社女子学校を卒業するまでの7年間寄宿舎生活をおくった。

ライ病との誤診をきっかけに、大正9年(1920年)レゼー神父のもとで洗礼を受け、3年後看護婦免許をとり、救ライ事業に全生涯を捧げた。

黄綬褒章を授与され、日本人として6人目のナイチンゲール記章を受章。朝日社会福祉賞も受賞した。

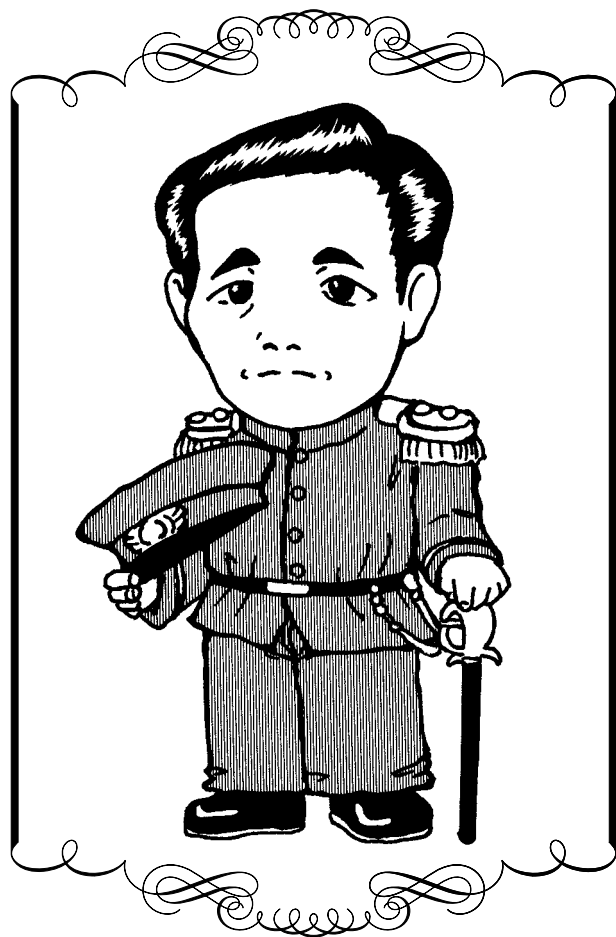


え び な す え ま さ
海老名 季昌

1843 ~ 1914

パリ万博に向かう徳川昭武の随員として、慶応3年(1867年)横山主税^{ちから}と共に出発。その後、二人は欧州各国を訪問、見聞して帰国。間もなく鳥羽伏見の戦いに参戦、籠城戦中に家老に抜擢される。

戦後5年間東京で幽閉ののち警視庁に勤務、三島通庸^{みしまみちつね}の知遇を得て各地の官吏となり、会津三方道路建設にも力を尽くした。退官後は若松町長として、市制施行に尽力した。晩年、妻リンに導かれ洗礼を受ける。

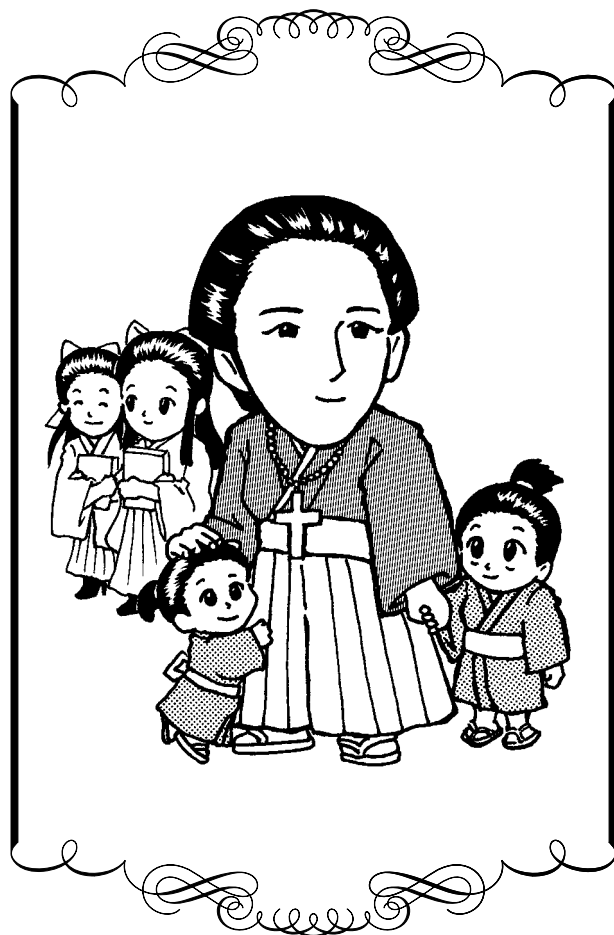


えびな りん 海老名 リン

1849 ~ 1909

幼児から^{れいり}怜悧さをうたわれていた。17歳で^{すえまさ}季昌と結婚、^{となみさんのへ}維新後斗南三戸に移住。夫の警視庁勤務に伴い上京、各地をまわり、再び上京し、リンは東京婦人^{きょうふうかい}矯風会副会頭となり、社会活動に励んだ。

明治21年(1888年)リンは、霊南坂教会で洗礼を受けた。43歳で保母の資格を取得。1892年リンと季昌は若松に戻り、翌年若松幼稚園を設立。さらに女学校(現葵高校)を創設。会津における幼児教育・女子教育の先覚者である。キリスト教をやめよという夫に「殺されても止めぬ」と強固な意志を伝えた。



おけい

1852 ~ 1871

材木町裏の芋荳^{いもがら}新田に農民の子として生まれる。プロシア人の会津藩軍事顧問スネル家の子守りとして、明治2年(1869年)17歳でアメリカに渡る。日本女性初のアメリカ移民であった。スネルはカリフォルニア州で農場若松コロニーを開くが、間もなく失敗に終わり、スネルは金策と称し欧州に渡る。

一人残されたおけいは、近くの農場主ビアキャンプ家引き取られたが、熱病で19歳で病死した。カリフォルニアと背炙山^{せあぶりやま}山頂に墓がある。

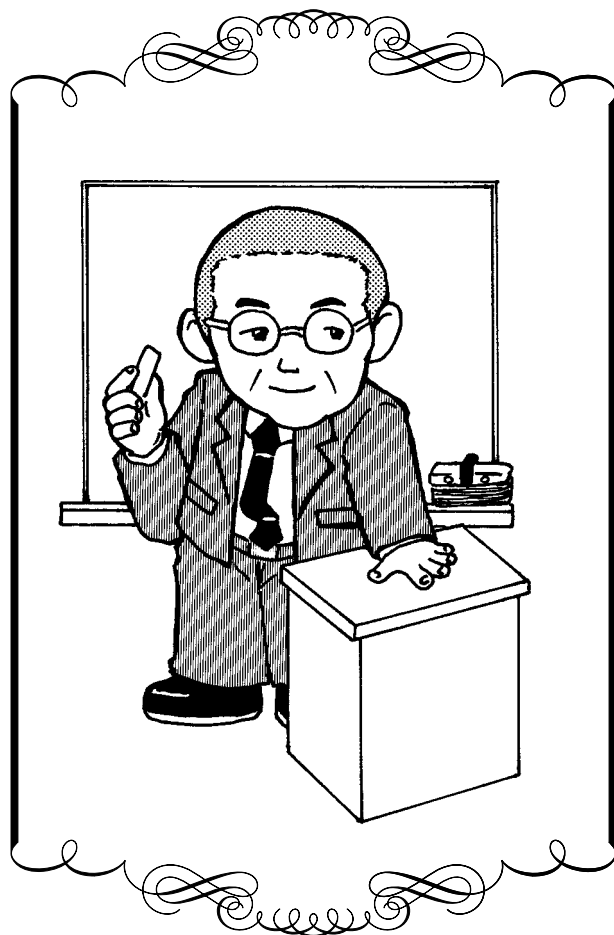


かとう りきち
加藤 利吉

1882 ~ 1962

戊辰戦争後、「会津にいてもやれることは限られている。自分は学問が好きだ、大好きだ。だから学問で身を立てる」といって、16歳のとき、木炭100俵を貨車に積んで単身上京し、自活しながら勉強した。

「育英塾」(現仙台育英学園) 創設。会津藩の
じゅう
仕の教えを建学の柱としている。あだ名ライオン先生。飯盛山に顕彰碑がある。



さいごう しろう
西郷 四郎

1866 ~ 1922

講道館の柔道四天王の一人。

会津の名家老西郷^{たのも}頼母の養子に迎えられた。

陸軍士官学校入学を希望したが、小柄なため目的を果たせず「小兵よく大兵を制す」という^{かのう}嘉納^{じごろう}治五郎の講道館柔道に魅せられ明治 15 年 (1882 年) 入門。「西郷のあとに^{やまあらし}山嵐なし」といわれた名人技を工夫した。

富田常雄の小説『姿三四郎』は西郷をモデルにしたといわれる。



さいごう ち え 西郷 千重

1834 ~ 1868

非戦論家老西郷頼母近恵さいごうたのもちかのりの妻で、登城する夫とこれに同行する 11 歳の倅吉十郎を見送り、出陣の挨拶に立ち寄った甥飯沼貞吉いいぬまさだきち（白虎隊士で生き残った）を励ましてから、国難に際し、いくさ「戦の足手まとい」となるのを不本意とし、家族を集めて大義を説き、一家一族の 21 人が自刃した。

辞世の和歌（善龍寺「なよ竹の碑」）
『なよ竹の風にまかする身ながらも たまわぬ節ふしはありとこそきけ』

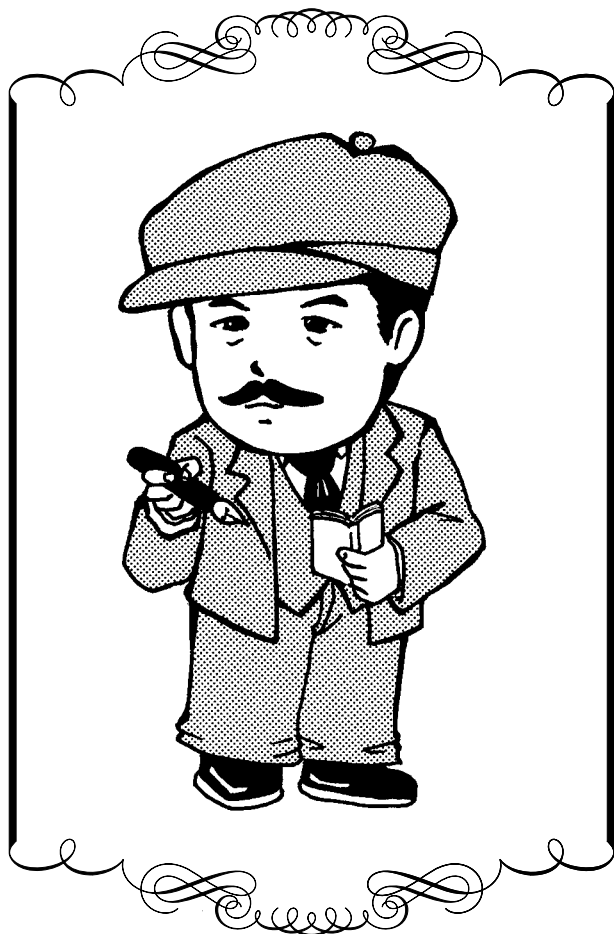


しば しろう
柴 四郎

1852 ~ 1922

藩校日新館に学び、16 歳のときろうじょう籠城するが、家族の多くが自宅で自刃した。明治 10 年 (1877 年) 西南戦争で谷干城たにたてきに見出され、財閥の援助で 27 歳のとき米国留学を果たし、ペンシルバニア大学などで経済学を学ぶ。

帰国後、留学中に想を練った小説『佳人之奇遇』かじんのきぐうをペンネーム東海散士の名で発表、明治期のベストセラーとなる。のちジャーナリスト、衆議院議員としても活躍する。弟は陸軍大将柴五郎。

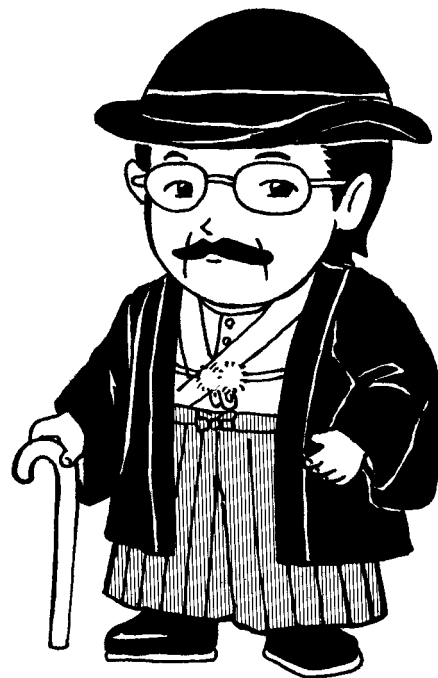


たかみね ひでお
高峰 秀夫

1854 ~ 1910

会津藩校日新館で学んだ後、慶応義塾に入る。
明治8年(1875年)文部省出仕、アメリカに派遣
され、師範教育に関する研鑽を重ね、帰朝後※ペ
スタロッチ運動を起こし、ジョホノットの教育説の
紹介につとめ、開発教育の精神を鼓吹して教育法
の革新を図った。これが縁でジョホノットの教育書
『教育新論』を訳した。

東京高等師範・東京美術・東京音楽各学校の
校長を勤めた。



※ペスタロッチ：民衆教育を実践

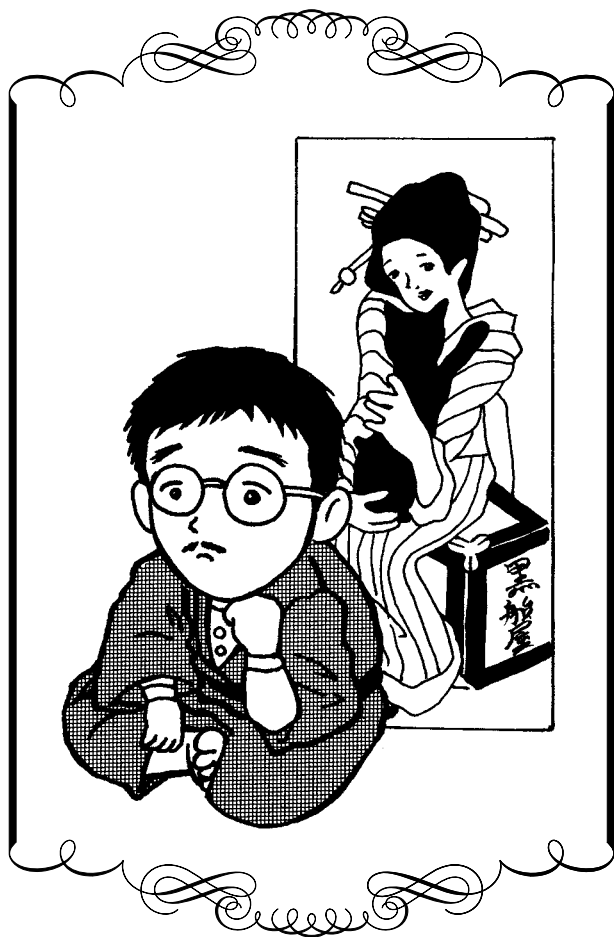
たけひさ ゆめじ
竹久 夢二

1884 ~ 1934

明治 35 年 (1902 年) 早稲田実業学校入学。
女性たちに人気があり一世を風靡した画家。詩人の彼は、雑誌『少女』に「宵待草」を掲載したが、その構想は会津で浮かんだものといわれている。

なお楽譜「お江戸日本橋」の装幀を 280 も手がけた。明治 10 年 (1877 年) 会津に長期滞在し、その間の作品が会津に多く残っている。夢二式日本画を確立。

また会津出身のスタイル画家で著名な長沢節は彼の影響を受けた。



なかの たけこ
中野 竹子

1848? ~ 1868

会津藩江戸常詰・中野平内、孝子^{こうこ}の娘として江戸で生まれ江戸で育つ。薙刀^{なぎなた}や書道に長けた。鳥羽伏見の戦い後、会津に戻る。戊辰戦争では娘^{じょう}子隊^{したい}を結成、城下郊外柳橋で西軍と遭遇、敵弾にあたり母孝子と妹優子^{ゆうこ}が介錯^{かいしゃく}した。

竹子の薙刀には「もののふの猛^{たけ}き心にくらぶれば 数^いにも入らぬ我が身ながらも」の辞世の和歌が結ばれていた。母孝子と妹優子はその後、入城^{ろうじょう}し籠城戦で活躍した。



なかの ゆうこ
中野 優子

1852 ~ 1931

戊辰戦争の時は16歳だったので、母と姉に、
「生け捕られてどんな憂き目に遭わぬとも限らぬ」と
心配されたが、優子のたつての希望で参戦し、城
下の西端柳橋（涙橋）付近において西軍と衝突。
娘子隊として母孝子、姉竹子らとともに戦った。竹
子を亡くした後に母とともに鶴ヶ城に入城して、活
躍した。

戦後は斗南となみに移住結婚して函館に住み、80歳
で没した。



のぐち し か
野口 シカ

1853 ~ 1918

野口英世の母。息子を信じ、英世を語るにはその母シカを語らなくては言われる。気丈な母で世間の恩義に対してもきびしい節度を持っていた。50歳を過ぎて助産婦の免許を取得し、社会のためにと働きぬいた。しかし反面、明治45年の英世宛の手紙にはたどたどしい平仮名で「はやくかえってきてくだされ、一生のたのみであります」と母親の情愛をのぞかせ、3年後には英世は帰省した。気を張りつめて生き抜いた庶民の一生であった。



のぐち ひでよ 野口 英世

1876 ~ 1928

猪苗代湖畔の赤貧^{せきひん}農家に生れ、加えて3歳時、
囲炉裏^{いろり}に転落して左手^{やけど}を火傷。そのハンデをバネ
に周囲^{かて}の人情を糧として世界に羽ばたき、細菌学
者としてノーベル賞候補にもなった。

会津若松市中町にある旧會陽^{なかもち}医院は、幼少時^{かいよう}
代に火傷^{やけど}した手の手術を受け、青春時代の3年
間を書生として過ごした場所で「野口英世青春
通り」の由来となった。



まつえ とよひさ
松江 豊寿

1872 ~ 1956

第一次世界大戦時、陸軍大佐で（徳島県）
ばんどうふりよ
坂東俘虜収容所長時代に、ドイツ兵俘虜を民族を
超えた信頼感と温情ある態度で人道主義的に処遇
した。その時俘虜たちによって演奏された交響曲
「第九」の演奏会は今日、毎年暮れに全国で行わ
れ輝いている。

第9代若松市長も務めた。退任後は会津弔霊
ぎかい
義会専務理事として、白虎隊墓地の拡張に尽力
した。



まつえ はるじ
松江 春次

1876 ~ 1954

松江豊寿の弟。ルイジアナ大学を卒業後、大日本製糖大阪工場長に就任。日本で初めて角砂糖の製造に成功して一躍名をあげた。南洋群島が日本の委任統治になると、現地の産業一切を担当し南洋興発(株)を創立、「南洋開発の父」と呼ばれた。

郷土愛が強く、昭和14年(1939年)に現福島県立会津工業高等学校に33万円を寄付し、機械科を設立した。



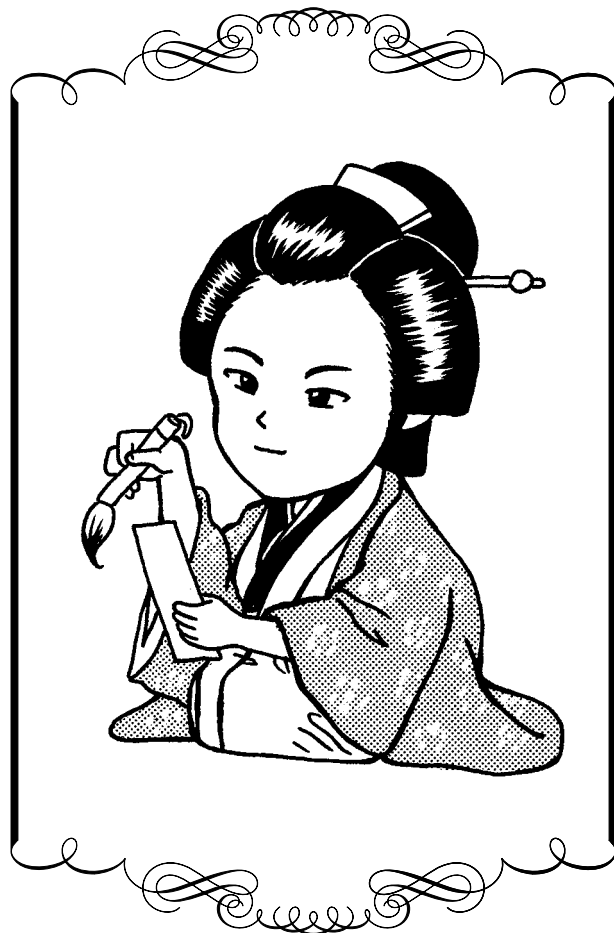
まつだいら てるひめ
松平 熙姫

1832 ~ 1884

飯野藩保科家より会津藩八代藩主松平容敬^{かたataka}の
養女^{ふぜん}となる。豊前中津藩主に嫁ぐが、のち離縁。
文久3年(1863)生麦事件のあと、初めて鶴ヶ城
に入る。籠城戦^{ろうじょう}では婦女子を指揮して活躍した。

熙姫は書や和歌に堪能で、松平容保にも手ほ
どきしたという。

戊辰戦争の責任をとり切腹を命じられた家老萱^{かや}
野権兵衛に「夢うつつ思ひも分ず惜しむぞよ まこ
とある名は世に残れども」の歌を贈った。



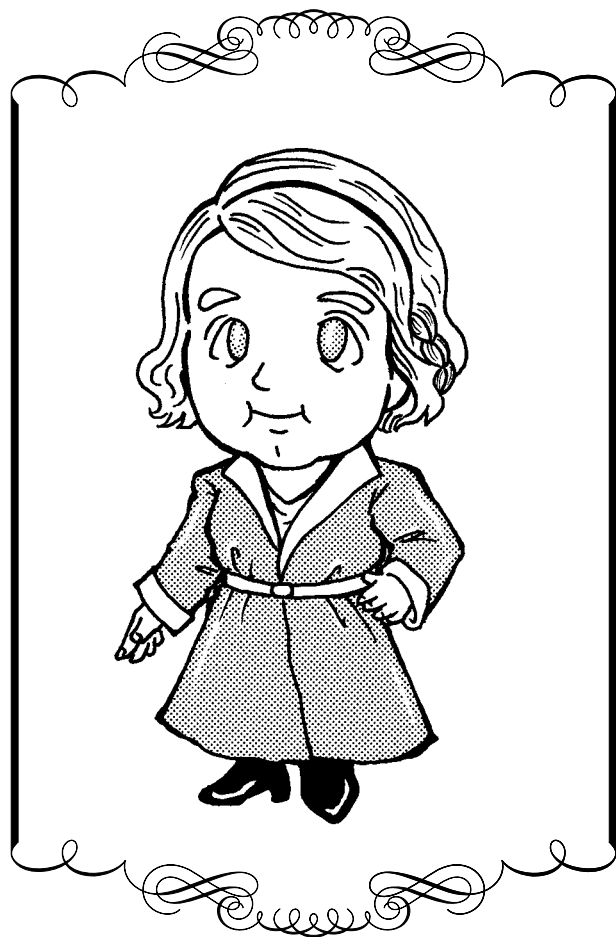
めりー　だーじす　のぐち メリー・ダージス・ノグチ

1882 ~ 1947

野口英世の妻。

アイルランド系アメリカ人で野口英世と結婚した。
英世の突然の死で、妻のための遺産として何も残
らなかったで、ロックフェラー研究所では生前の
博士の労に報い月 50 ドルを送った。

その中からメリーは、博士の郷里猪苗代の実姉
イヌに毎月 10 ドルを仕送りしていたという涙ぐましい
国際愛の持ち主だった。



やまうち よ ね
山内 ヨネ

1882 ~ 1945

海老名リンの経営する私立女学校に学んだ。野口英世は栄町教会でヨネを見そめ、何度もラブレターを書き、彼が21歳で医術試験に合格し、中国に出発するに先立ち、将来の結婚を申し込んだがヨネはやんわりと断った。

かぶきもん
冠木門に「三省堂」の看板を掲げて開業し、2年後結婚するが、4人の子どもを残して夫が死去、ヨネは医療の最前線に立った。帰朝した英世の厚意を断り続けた。

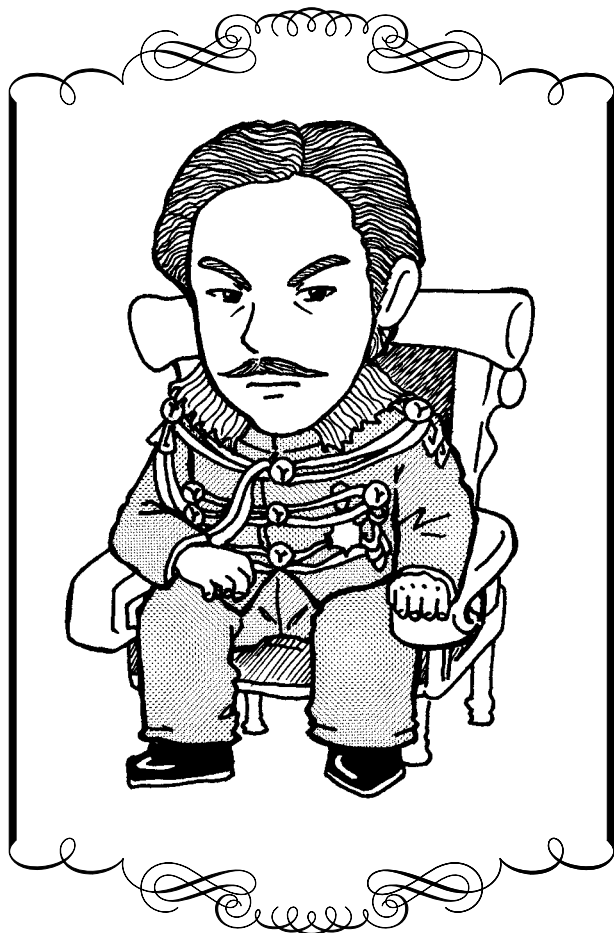


やまかわ おおくら ひろし
山川 大蔵 (浩)

1845 ~ 1898

幕府の使者に同行し、ロシアに渡り攘夷の非
を悟る。戊辰戦争では日光口を守り、籠城戦中
の鶴ヶ城に、小松村の彼岸獅子を先頭にたて敵
前を突破、援軍の無血入城を果たした。維新後、
じょうい
斗南藩権大参事となみはんごんだいさんじとして藩を主導した。

西南戦争で活躍、陸軍少将となり、明治18年
(1885年) 東京高等師範学校校長、のち貴族院
議員、男爵に叙せられる。晩年、『京都守護職始末』
を著し、弟健次郎が完成させた。妻登勢(19歳)
は「焼玉押さえ」で死亡。



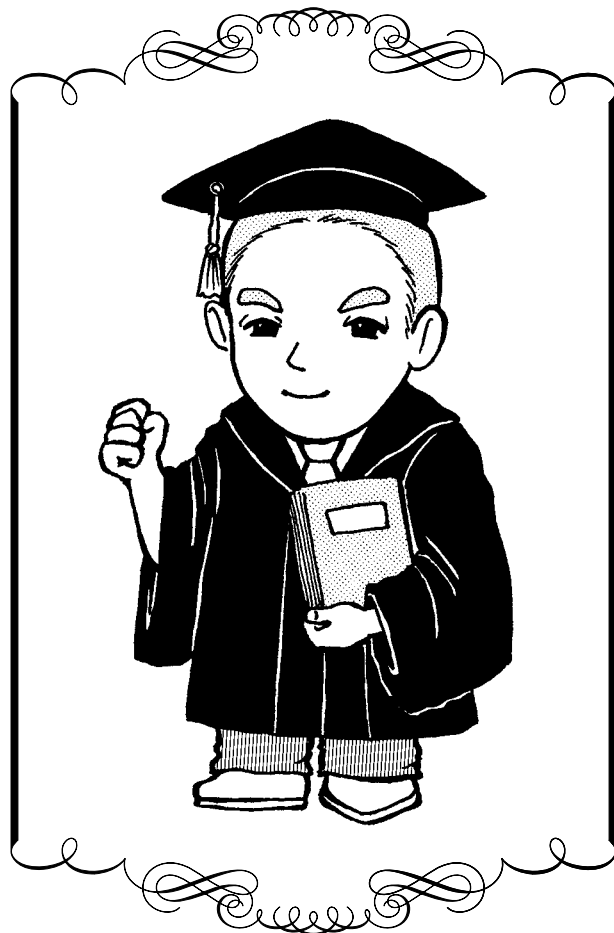
やまかわ けんじろう
山川 健次郎

1854 ~ 1931

15歳の時、戊辰戦争で籠城戦を体験。日新館きっての秀才で明治4年アメリカに留学し、エール大学で物理学を学び、日本人初の理学博士号を取得。留学中は同時期バツサー大学に通っていた妹捨松に日本語を忘れない様に教えていた。

明治12年日本人として最初の物理学教授となった。後に東京・京都・九州の各帝国大学総長を歴任し、明治の「知性」といわれた。その後51歳で貴族院議員となり77歳で死去。

浩の弟で、捨松の兄。



やまかわ おおやま すてまつ
山川 (大山) 捨松

1860 ~ 1919

幼名は咲^{さき}、8歳の時、戊辰戦争籠城戦を体験。
明治4年(1871年)日本初の女子海外留学生として渡米、この時母山川艶^{えん}は捨てたつもりで帰りを待つと、捨松と名を変えさせた。優秀な成績でアメリカの大学を卒業、同15年に帰国した。

翌年薩摩の陸軍卿大山巖と結婚、鹿鳴館の華^{うた}と謳^{うた}われた。津田梅子の英語塾を支援し、鹿鳴館で日本初のバザーを開催、益金を日本初の看護婦養成学校設立のため寄付、その後も社会福祉事業に活躍した。



やまかわ ふたば
山川 二葉

1844 ~ 1909

名門山川家長女。幼くして文才があり、長じて梶原平馬に嫁いたが離婚。東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大）に奉職し、舎監として28年間女子教育に尽して高等官に任じられ、従五位に叙せられた。

弟浩・健次郎とともに男爵となり、妹操は照憲皇太后の女官となった。



やまもと かくま
山本 覚馬

1828 ~ 1892

会津藩士。^{はまぐりごもん}蛤御門の戦いで砲兵隊を率い活躍したが、鳥羽伏見の戦いで薩摩藩に捕えられる。

目の病で盲目となり獄中で政治、経済、教育、産業など 22 項目にわたる、今後の日本のあるべき姿ともいうべき意見書を提出。維新後、京都府の顧問として京都府政を指導した。

アメリカ帰りの新島襄^{にいじまじょう}を助け、同志社英学校（のちの同志社大学）の創設に力を尽くした。京都府議会初代議長、京都商工会議所会頭を務めた。



やまもと にいじま や え
山本 (新島) 八重

1845 ~ 1932

会津藩砲術師範の家に生まれ、兄覚馬の指導で鉄砲を学ぶ。戊辰戦争ではスペンサー銃を持ち、夫川崎^{しょうのすけ}尚之助と共に敵と戦った。敗戦後、「明日の夜はいつこの誰か眺むらん 馴れしお城に残す月影」の歌を詠んだ。維新後、尚之助と離婚、覚馬の待つ京都に移る。

^{にょこうば}女紅場の舎監兼教師となり、新島襄と結婚、同志社の発展に尽くした。襄没後は社会福祉活動に尽くし、女性初の勲七等宝冠章を受章。



ゆあさ うめ 湯浅 うめ

1896 ~ 1947

看護婦免許を取得しロンドン駐在日本大使館書記官松平恒雄に随従して英国に渡った。同夫人信子も同行しており、そこで秩父宮勢津子様が誕生された。

奉天、フランスで看護活動をし、その功により勲八等瑞宝章、さらにフランス政府より銀製名誉記章とオブヒシェー・ダカデミー記章授与。第1回ナイチンゲール記章を受けた。



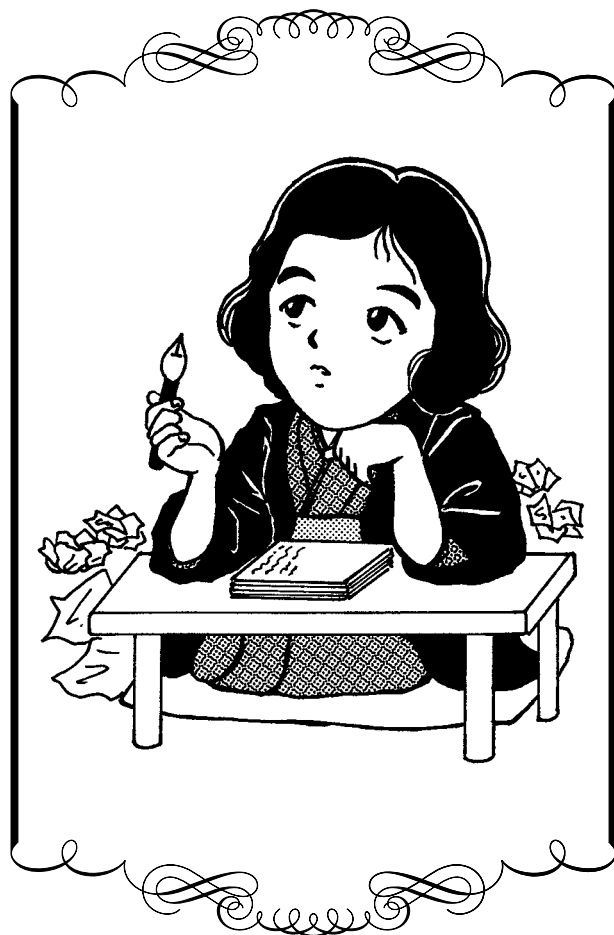
よ さ の あ き こ 与謝野 晶子

1878 ~ 1942

与謝野鉄幹の新誌社に加入して、『明星』に作品を発表。「君死に給ふこと勿^{なかれ}」は反戦歌として反響を呼んだ。9 児の母として賢母振りを発揮するとともに、生涯作歌への情熱を燃やし続けた。

明治 44 年鉄幹らと会津の旅中、東山滞在に詠んだ歌は歌集『青海波』に、二度目の会津の旅は「会津詠草」として『白桜集』に収められている。

「白虎隊屠腹^{とふく}の山の悲しみは 羅馬^{ろうま}の塔もなぐさめぬかな」



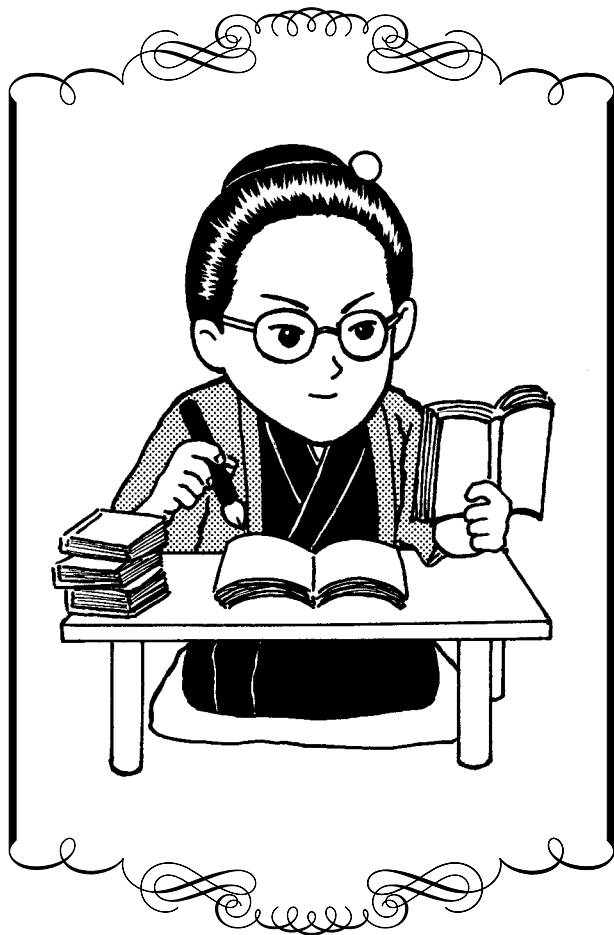
わかまつ しずこ
若松 賤子

1864 ~ 1896

会津藩士の長女として生まれ、7歳で横浜へ移り英語塾に入学し、フェリス・セミナーの第1回卒業生となる。本名は甲子^{かし}でペンネームは生地「若松」からとり、賤子^{しずこ}は「神の恵みに感謝するしもべ」の意味。

結婚式の日『花嫁のヴェール』と題した詩を夫巖本善治に送り、女性のあり方を文学を通して語りかけた。日本初の女流翻訳家で児童にも読みやすいように口語体で『小公子』を翻訳した。

孫はヴァイオリスト巖本真理。



八重物語り

やえものがたり



八重は江戸時代、ペリー来航の8年前、1845年
11月3日会津若松城下、^{よねだいしのちょう}米代四之丁に父^{ごんぱち}権八、母
^{さく}佐久の五番目の子として生まれました。

父権八は会津藩の^{ほうじゅつ}砲術の先生で、母佐久はか
しこく思いやりのある人でした。



其ノ二

八重の兄弟

八重は6人兄弟、うち2人は早くに亡くなり、兄の
覚馬^{かくま}とは17歳も離れていました。

覚馬は江戸に留学し蘭学^{らんがく}や西洋の砲術などを習
い、藩校日新館^{にっしんかん}の蘭学の先生となりました。

弟三郎は京都鳥羽伏見^{とばふしみ}の戦いで負傷し、江戸の
会津藩屋敷で19歳で亡くなりました。



其ノ三

八重の育った所

会津若松城下は幕末、仙台藩に次ぎ東北第二の城下町でした。八重の住む^{よねだいしのちょう}米代四之丁は会津若松城（鶴ヶ城）の西にあり、南はすぐ外堀でした。

近くには藩校^{にっしんかん}日新館がありましたが、男子の学校ですから八重は入学することはできませんでした。



其ノ四

八重の少女時代

八重はたいへん力持ちで、12歳ころには60kgの米俵を4回も肩に上げ下げするほどでした。

活発な八重でしたが、「女に学問は必要ない」という時代で、武家の女子は7歳ころ読み書を習い、8歳で糸を紡ぎ、11,2歳から機織り、裁縫を習いました。



其ノ五

八重の結婚

八重は1865年ころ、川崎^{かわさき}尚之助^{しょうのすけ}と結婚しました。八重が20歳、尚之助は29歳でした。

尚之助は但馬^{たじま}国^{のくに}（兵庫県豊岡市）出身で、江戸^{えど}で覚馬^{かくま}と共に蘭学^{らんがく}を学びました。

会津にきた尚之助は覚馬の推薦で会津藩士に^{とうよう}登用され、日新館で蘭学や砲術を教えました。



其ノ六

八重、鉄砲を教える

八重は少女時代から、兄^{かくま}覺馬に鉄砲を習っていました。普通会津藩の女性^{なぎなた}が習うのは薙刀で、鉄砲を習ったのは八重だけです。

八重は^{ぼしんせんそう}戊辰戦争前、隣^{ていじろう}の伊東悌次郎に鉄砲の撃ち方を教えました。悌次郎は白虎隊に加わり^{いいもりやま}飯盛山^{じじん}で自刃、まだ15歳でした。



1862年会津藩主松平容保^{まつだいらかたもり}は京都の天皇や町を守る京都守護職^{しゅごしやく}を任命され、覚馬^{かくま}ら会津藩士約1,000名が京都に行き、天皇より厚い信頼を得ました。

1864年御所^{ごしよ}を守る会津藩を長州藩が攻撃する蛤御門^{はまぐり ごもん}の戦いが起こり、覚馬も活躍し会津藩が勝利しました。



其ノ八

八重と戊辰戦争

1868年1月京都で^{ぼしんせんそう}戊辰戦争が始まり弟三郎が戦死。兄^{かくま}覚馬も捕えられ、八重には殺されたという知らせが届きました。

戦線は次第に会津に近づき、8月23日(新暦10月8日)西軍は会津若松城下に攻め入り、一ヶ月間に渡る^{ろうじょうせん}籠城戦が開始されます。



ろうじょうせん
籠城戦に際し、八重は男装・弟三郎の形見の着
物に、7連発のスペンサー銃を肩に入城しました。

この時、髪を切り男の藩士とともに夜襲^{やしゅう}に加わり
ました。籠城した女性たちはご飯炊きや弾丸の製
造、傷病者の看護、砲弾の火消と大きな働きをし
ました。



其ノ十

籠城戦の八重

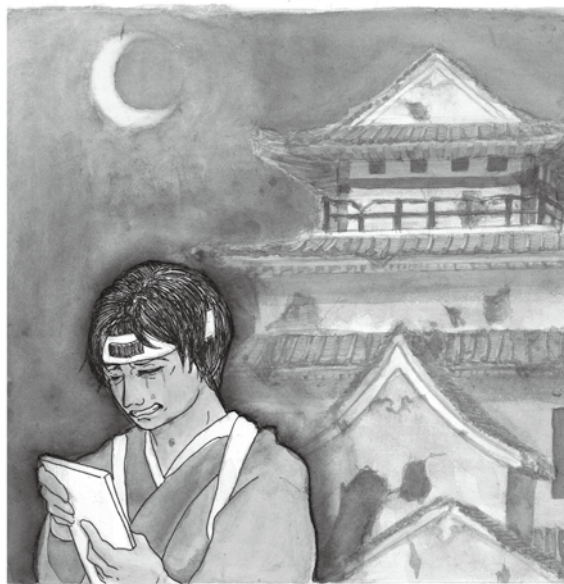
ほうじゅつしはん
砲術師範の娘である八重は、かわさきしょうのすけ
け、城南豊岡神社から大砲で小田山の敵の砲陣に
とよおかじんじゃ おだやま ほうじん
立ち向かい、見事弾が命中しました。

また鶴ヶ城・鉄門に陣取る藩主松平容保に、敵
くろがねもん まつだいらかたもり
から撃ち込まれた砲弾を分解し、その構造を説明
しょうさん
し賞賛されました。



八重の父^{ごんぱち}権八は9月17日59歳で戦死、そして一ヶ月間の^{ろうじょうせん}籠城戦の末、9月22日(新暦11月6日)ついに会津藩は降伏します。

その夜、八重は「明日の夜はいずこの誰か^{なが}眺むらん^な馴れしお城に残す月影」の歌を^よ詠み、この後夫^{かわさきしょうのすけ}川崎尚之助と^{りこん}離婚しました。



1871年10月八重と母^{さく}佐久、^{かくま}覚馬の娘みね、伯母の四人は、消息の分かった京都の覚馬の元に行きます。

そこで八重は新しくできた女^{にょこうば}紅場（女学校）の先生となり、^{はたお}機織りなどを教えました。また八重自身も外国人^{せんきょうし}宣教師に英語や聖書を学びました。

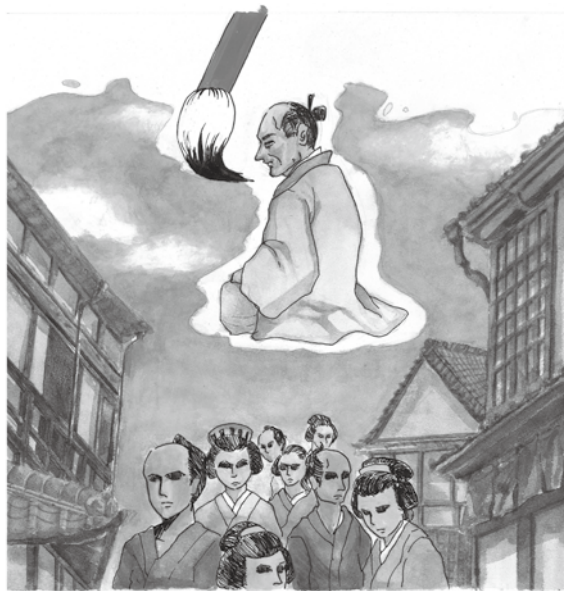


其ノ十三

八重の兄・山本覚馬

京都で捕えられた^{かくま}覚馬は牢^{ろう}の中で、今後の日本の政治、経済、産業、教育などについて意見書^{あらわ}を著し認められました。

覚馬は京都府の顧問^{こもん}となり、京都府議会議長、商工会議所会頭を務め、京都の近代化や、^{じょう}襄の学校建設にも大きな働きをしました。



1875年八重はアメリカから帰国した^{にいしまじょう}新島襄と出会います。襄はキリスト教主義の学校創設のため京都に来たのです。

その年、同志社英学校が開校、翌年八重は洗礼を受け、キリスト教式の結婚式をあげました。八重は30歳、襄は32歳でした。



じょう
襄はアメリカの恩人宛の手紙に「彼女は決して容姿が美しいわけではありません。しかし、彼女についてわかっていることは、彼女は行いが立派な人 (the person who dose handsome) ということです。私にはそれだけで十分です」と記しています。

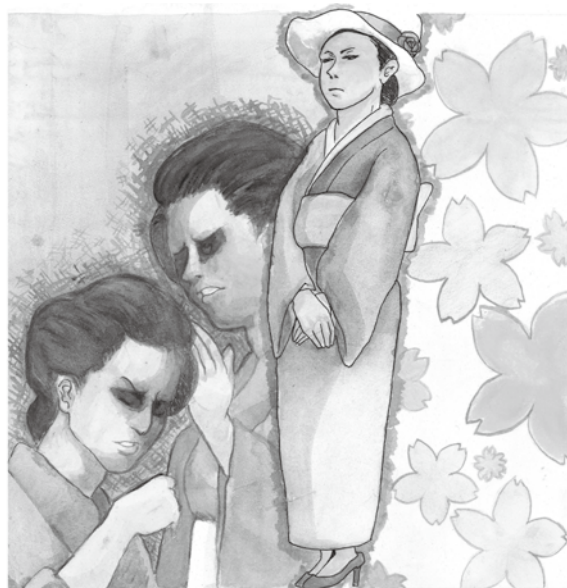


其ノ十六

八重、悪口をいわれる

八重は帽子や洋服、靴など、明治の女性としていち早く^{ようそう}洋装を取り入れました。

また^{じょう}襄とともに男女同権を行為で示しましたが、
^{だんそんじょひ}男尊女卑の時代にあつて八重は^{れっぶ}悪妻、烈婦などと
^{ちゅうしょう}中傷されます。それでも八重は強い意志で、男女平等の世を目指しました。



1882年八重は久しぶりに帰郷、^{じょう}襄は初めての会津訪問で、七日町の清水屋旅館に宿泊。八重の住んでいた所は桑畑、柿畑、鶴ヶ城も堀と石垣だけとなっていました。

この時、栄町の清水屋では三方道路建設に伴う自由民権派への暴力事件が起きました。



其ノ十八

八重の夫・襄の死

^{じょう}襄は体が丈夫ではなく、八重の看護の甲斐なく
1890年47歳の若さで亡くなります。

八重は社会奉仕に活動の場を見出し、日本赤
十字社の社員、1895年には看護婦の社会的地位
向上をはかるため、篤志看護婦として日清戦争に
^{じゅうぐん}従軍、看護活動を行いました。



八重は看護活動の功績により、1896年民間女性として初めて勲七等宝冠章^{ほうかんしょう}を受章しました。晩年は同志社の生徒をかわいがり「新島のおばあちゃん」として親しまれました。

また裏千家茶道^{うらせんけちやどう}に入門し、女性の茶道普及にも貢献し、宗竹^{そうちく}の号を受けました。



其ノ二十

八重、天に召される

1928年^{まつだいらかたもり}松平容保の^{せつこひ}孫勢津子妃の^{ちちぶのみや}秩父宮様と婚礼の際上京し「いくとせか峰にかかれるむら雲の晴れて嬉しき光をぞ見る」の歌を詠みました。

1932年6月14日八重は87歳という高齢で亡くなり、その葬儀には2,000人もの人が集まり別れを告げました。



はいからさんに逢えるまち 会津ゆかりの先人・偉人

2014 年 3 月 31 日 第 1 版 発行

監修 野口 信一

挿絵 人物編 … 中野絵美
八重物語り編 … 福島県立茨高等学校 美術工芸部（平成 24 年度）

文 野口 信一

企画発行 会津の「はいからさん語り部」育成プロジェクト実行委員会
委員長 小野寺裕子
福島県地域づくり総合支援（サポート）事業

製本 株式会社リフコム会津